

# 肺がん

## はじめに

長寿県沖縄をおびやかす病気に肺がんがあります。肺がんの治療成績は、いまだ満足すべきものではありません。手強い病気の一つです。しかし、肺がんに対する診断の技術が着実に進歩し、その治療の成績は向上してきております。治療方法の発達以上にCTスキャンをはじめとする診断の技術の発達がめざましいものがあります。それでも肺がんという病気は、早期に見つけて、素早く手術でとってしまうのが確実な治療法であることには間違いありません。

二十年ほど前は、外来に十名の肺がんの患者さんが見えると、手術にもっていける患者さんは約三名でした。残りの七名の患者さんは、手術ができない状態、すなわち進行がんでした。それが最近では、五から六名の方が手術にもっていけるようになりました。患者さん何人のうち、何人に手術ができたかを「切除率」という数字で表現しますが、最近では切除率は50%を越しております。これもひとえに、病気が早期に見つかるようになったことによるものです。

## 肺がんの種類

肺がんには、4つの顔があります。各々性格の異なる4つのタイプです。多い順番に並べますと、腺癌、扁平上皮癌、小細胞癌、大細胞癌というタイプです。各々の特徴があり、性格も異なり、治療の方法も異なりますので、肺癌という診断だけでは不十分で、肺がんの中のどのタイプだということまで診断することが大切です。

肺がんの中の「腺癌」は、最近の肺がんの中では最も多いタイプです。去年、平成十九年の一年間に国立病院機構沖縄病院で百十五人の肺がんの手術が行われました。内訳をみますと、腺癌八十五人、扁平上皮癌が二十九人でした。腺癌は、肺の端っこ、「肺野」にできます。ですから、レントゲン写真で見つけやすい肺がんです。女性に多い肺がんですが、最近では男性にも多くみられるようになりました。

「扁平上皮癌」は男性の肺がんの代表格でした。タバコと直接関係します。タバコの煙の通り道、すなわち肺の入り口、「肺門」にできます。レントゲンには写りにくいため、痰の検査でよく見つかります。ヘビースモーカー、男性の肺がんです。

肺の「小細胞癌」も個性の強い肺がんです。肺がん全体の約15%程度を占めます。やはりタバコと関係が深いのですが、さきほどの扁平上皮癌に比べると進行が非常に速いタイプです。見つかったときには、すでにⅢ期、Ⅳ期の進行がんであることがしばしばです。幸いにも、このタイプの肺がんは抗癌剤や放射線療法がよく効きます。

## 肺がんの発生部位

肺がんは、できる場所により「肺門部肺がん」と「肺野型肺がん」の二つのタイプに分けられます。肺門には扁平上皮癌や小細胞肺癌ができやすく、腺癌や大細胞癌は、主として肺の端っこ、末梢、すなわち肺野によくできます。

#### 肺がんの症状

肺がんの症状は、咳や痰の呼吸器症状が最も多いのですが、痰に血が混じったり、ゼーゼーしたり、病気が進んできますと息苦しくなったり、痛みもでます。転移がありますと、声がかすれたり、胸に水が溜まって息苦しくなったり、顔や首が腫れたりします。脳に転移がきますと頭痛や手足が麻痺したり、意識を失うこともあります。骨への転移は、痛みを伴います。色々な全身の症状、食欲がでない、体重が減る、節々が痛い、手足に力が入らないなどの症状がみられることもあります。

しかし、このような症状のない段階で、無症状で病気を見つけないものは、そのためにも、検診を受けることが大切です。

#### CT検査

肺がんの診断技術は、近年、かなり発達してきました。特に、コンピューター断層撮影と言われますCTの性能が格段よくなりました。住民検診や通常健康診断などで撮る胸のレントゲン写真には限界があります。病気が1 cm以上の大きさがないと分かりづらいことと、心臓や肝臓、骨などの影に重なってしまいますと3 cmでも5 cmでも見逃されてしまうことがあります。

タバコを吸われる方はもちろんのことですが、身近に癌を経験された方（癌家系といわれますが）、何らかの肺の病気を以前に煩ったことのある方、そして最近気になっていることですが「高血圧」で治療を受けておいでの方も、時にはCTの検査を受けられることをおすすめいたします。

#### 肺がんの治療

肺がんの治療方法は、大きく三つに分けられます。まずは、手術です。それから、抗癌剤による治療、それから放射線による治療がありますが、これらの治療方法をいくつか組み合わせることもあります。

この最近の十年で、手術に対する考え方が大きく変わりました。早く見つけて、早く手術にもっていくという基本的な考え方に変わりはないのですが、痛みのない、傷が目立たない胸腔鏡による手術が爆発的に普及しました。私どもの沖縄病院の呼吸器外科手術の七割が胸腔鏡で行われております。

抗癌剤も切れ味がよくなりました。抗癌剤には、副作用がつきものですが、その副作用を抑える工夫もされるようになりました。まだまだ、発達し、やがては肺がんも薬で治すような時代がやってくるかも知れません。

病気が進行して、どうしても治療が意味をなさない際には、できるだけ全身の状態をいい状態に維持する治療とか、症状、痛みや息苦しさ、熱などの症状を抑える緩和医療が選ばれることもあります。

肺がんの種類、できた場所、進み具合などを参考にしまして治療の方針をたてます。

### 肺がんのできやすい年齢

肺がんには、できやすい年齢があります。六十歳代、七十歳代に多くみられますが、最近目に付きますのは八十歳代の肺がんです。沖縄県は長寿県ですので、八十歳代の肺がんの患者が多くみつかります。

八十歳以上でも、お元気な方が多く、毎年、約二十人の八十歳以上の肺がんの患者さんの手術が行われます。高齢の方の手術を検討する際に、心臓の働きはどうか、肺の働きはどうか、ほかに病気はもっていないかどうか慎重に検討しますが、これらの検査以上に主治医が参考にすることは、この患者さんは暦の実際の年齢よりも若いという印象を大切にします。気が若い、気持ちの持ち方が若いということは大切な条件です。

手術に踏み切るかどうかは、病気のすすみ具合でⅢ期を境にして考えます。リンパ腺への転移が、あまり進んでいないケースは手術を先行させます。これらの治療方針も、ご本人と家族の同意がなければできませんので、本人の意向を優先させます。インフォームド・コンセントが尊重される時代になりました。徹底した病状説明の後に、治療方法を決定します。

### 沖縄県のがんの特徴

沖縄県は、肺がんの多発地域と言えます。胃がんが極端に少ない県です。胃がんは全国平均の約二分の一です。ですから、肺がんがとくに目に付きます。以前は、沖縄の肺がんは扁平上皮癌が多いことが特徴でした。しかし、時代の流れとともに扁平上皮癌は減り、腺癌が増加してきました。この現象は、子宮がんでも言えます。子宮頸がんは、扁平上皮癌ですが、年々減少しております。子宮体がんは増加しております。このように、病気の中味は時代と共に変化していきます。

### 検診の必要性

沖縄県における肺がん検診の受診率は二十数%で、全国平均よりもわずかですが上回っております。腺癌は肺野型肺がんで、レントゲンで見つかる肺がんです。ですから、検診の受診率が上がれば、より多くの肺がんが見つかることになります。

検診（健診）の必要性を示すデータです。肺がん発見のきっかけを二つの群に分けてみました。検診で見つかった肺がんと何らかの症状があって見つかった肺がんを比べてみました。検診発見の肺がんの約六割はⅠ期、Ⅱ期の比較的早い段階の肺がんですが、何らかの症状があって見つかった肺がんの約八割はⅢ期、Ⅳ期の進行肺がんであることが分かります。

四十歳をすぎたあたりからは、年一回の検診、住民検診、職場検診、人間ドック等を欠かさず受けることが大切です。加えて、身近に「かかりつけ医」をもって、日頃の健康チェックを受けることをおすすめいたします。なんでも相談できる「かかりつけ医」、日頃の顔色を知っている主治医がいることは大切なことです。

### 呼吸器外科の発達

近年、肺がんの治療に関連して、呼吸器の外科はめざましい進歩がみられました。まず最初に、麻酔の発達に負うところが大きいです。「分離肺換気」という方法が可能となり、右の肺の手術の際には、左の肺で麻酔を維持し、手術をするほうの肺は動きを止めてしまうことができるようになりました。動いている肺を手術するのと、静止した肺の手術ではその難易度、安全性で大きな差異があります。

「CTスキャン」の普及によって、小さな病気が見つかるようになりました。それによって、手術も縮小手術、小さな範囲の手術が試みられるようになりました。

それから医療光学機器の発達、「自動縫合器」の発達により、胸腔鏡による手術が普及しました。胸腔鏡による手術は、体の中にカメラを入れて、手術室のテレビ画面に映し出し、その画面をたよりに手術をします。小さな傷で手術が行われますので、手術の後の痛みが少ないことと、手術の傷が目立たないことが特徴です。

自動縫合器は、瞬時に臓器を縫い合わせて、切り離します。時間をかけて丹念に糸針を用いて縫い合わせていた操作が、瞬時にできるようになりました。肺も、気管支も、動脈も、静脈も自動縫合器で処理することが可能となりました。それも、安全にできるようになりました。

#### 肺がんの予防

一般的な「がん予防」のための食事の工夫は、偏った食生活にならないよう品数を多くとることが大切です。塩分や脂肪分は控えめにします。野菜を十分にとりましょう。お酒は飲み過ぎないように、タバコは吸わないことです。

胸腔鏡でもって人間の胸の内を覗いてみた写真です。タバコを吸わない方の肺です。本来、人間の肺は、このようにピンク色のきれいな肺です（左）。対照的に、喫煙者の肺です。肺の表面にタバコの煤がこびりついています（右）。

十代でタバコを吸い始めますと多発癌の発生の危険性が高まります。喫煙開始年齢は大きな問題です。中学生、高校生の喫煙が目につきます。喫煙の問題は、タバコの本数も影響しますが、喫煙開始年齢も多発癌を誘発しますので注意が必要です。

#### まとめ

禁煙による予防と検診（健診）による病気の早期発見・早期治療により肺がんの治癒がもたらされます。